

だんしはしんだわかってた③

西をさむ

当てつけに死んでやろうか万愚節 真砂女

真砂女さんの胸中を、どれ程の男達が通り過ぎて行ったでしょうか。否、彼女の温もりの中で泣かせて貰ったでしょうか。

「わたしはたくさんの夢を見させて貰いましたよ。それだけで十分生きて来られました。死ぬなんてしませんから」。

真砂女さんの人生は、女性その物であった様な気がします。

「落語とは人間の業の肯定である」。これを二文字変えてみます。「俳句とは人間の業の肯定である」。そうら、色々の声が聞こえて来ます。「花鳥諷詠だろ」。「物を良く見るんでしょ」。それはその通りです。しかし、その行為は誰がするんですか。あなた達、即ち人間の為せる事でしょう。残念ながら文章を書いたり、読んだりするのは人間にしか出来ないのです。俳句も人間が創った文芸です。根底には人間の業が蠢いて居るのです。

美しい花を愛でるのは、対極的に醜い物が無意識に働いて居るからです。

俳句を作る時にあなた方の心は何に向かっていますか、俳句を鑑賞する時にあなた方の心が動くのは何故でしょう。あなた方が人間として生きて来た事を肯定しているのです。

閑かさや岩にしみ入る蝉の声 芭蕉

どうでしょう。芭蕉さんは立って居ますか、それとも坐って居ますか。辺りの景色が見えますか。蝉の声が聴こえますか。色々な事に思い巡らせたならば、あなたはもう立派な俳句人です。

総ての物には、裏と表があると書きましたが、その対に成った物の裏側にもう一つ何かが有りそうです。それが、おかしみではないでしょうか。芭蕉さんの姿を思い浮かべられるのは、このおかしみの所為なのです。人間としての証です。今に残って居る名句、後世に残るであろう名句とは、この様な句で有ると思われます。

ここで滑稽俳句について考えてみます。そもそも滑稽とは何でしょう。おもしろおかしい事と一口に言えそうですが、そう簡単な物ではないのです。

前にも言いましたが、物事には裏表が有ると。では滑稽の表は何でしょう。裏は何でしょう。適当な言葉が見付かりません。無いんじゃないかと思えて来ます。そこで総ての物の裏側に潜んで居るのが滑稽だと考えてはどうでしょう。臃げながら何と無く理解出来た様な気に成ります。私達が滑稽俳句を作るその行為自体が滑稽ですから、余り気にする必要は有りません。

プラトンは、笑いの実は青いうちに摘んではならないと言っています。これだけを守れば十分です。

しかし、人間を越えた処にしか真の滑稽は生まれません。やっぱり難しい物です。

人間は人間を越えられないと言う事を立川談志は解っていたのでしよう。

戒名のお金で決まる涅槃西風 をさむ

作品引用：鈴木真砂女全句集 角川学芸出版

桂米朝句集

岩波書店